

社会鍼灸学研究会への期待

関西医療大学

八瀬善郎

鍼灸の捉え方

鍼灸学は、少なくとも東アジアにおいては、千年持続学である。その意味は、鍼灸は、古代中国にその源を発しながら、朝鮮半島、日本その他の地域に伝来し、それぞれの気候風土、それぞれの人種、民族の生活習慣の中で、長い歴史の変化に耐えて現在に受け継がれてきた。中国の各王朝の盛衰興亡と焚書坑儒、朝鮮半島も中国や日本の侵略、内戦による改廃や消失、日本でも明治以後の近代化や、敗戦による衰退など、国や、それぞれの政権の盛衰興亡を乗り越えた伝統の重みを持つ学問である。したがって、鍼灸学は、本来、文化人類学的視点の欠かせない学問領域である。

洋の東西を問わず、医学は生命を扱うがゆえに、その本質は、『流れ』であり『一回性』であり、科学が志向するような客観性や再現性は厳密にはありえない。唯極めて単純な次元において、共有できる認識の中で、科学的対応がなされているに過ぎない。もちろん現代医学もその範疇に入る。

こうした前提に立って、日本の鍼灸学は、日本文化の特異性の上に成り立ってきたことを理解せずして今後の展望は開けないだろう。

日本文化の特徴の一つは、中国文化を消化吸収して、大和文化を築き挙げたことである。例えば、言葉についていえば、漢語と大和言葉（かな文化）の違いである。

大和言葉は、漢字、ひらがな、カタカナの三種類の文字を使用し、印象は

- 1) 心が内向的
- 2) 何か懐かしいものを抱きしめたいような気持ち
- 3) 魂に気負いのない情緒に触れるとき
- 4) 和歌や俳句はすべて大和言葉
- 5) 柔らかい、母の肌のごとく、乳房のごとく
- 6) やさしさの世界、フォーク的な世界

と言う特徴を持つが、漢語は一種類で

- 1) 心が外向的
- 2) 野心に満ち、征服的
- 3) 精神が知的に働き、対象との間に距離がある
- 4) 学術論文は漢語が主
- 5) 堅い、知的議論
- 6) 体制的・官僚的・管理社会的、法律の文書

と言う特徴を持ち規制的である(渡部昇一：日本語のこころ、ワック文庫、2003)。その中で、日本は、中国文化を輸入し消化し、数世紀かけて、独特の日本文化を築き上げた。

日本人的な感性とは、すべて言葉で言わなくても、人としての情報が十分伝えられるこ

とを重視してきた、世界の中でも得意な脳の特異分化を遂げたものである。

中国文化の模倣から江戸時代に開花した独創的日本鍼灸の土台は、日本人のこの特性による。

次に、言葉は時代や場所や、使われ方で内容が変化する。鍼灸学の中でも、基本の陰陽、経穴や経絡の意味するところが微妙に時空間の流れの中（例えば日、中、韓での見方）で異なってきたことを認識する必要がある。したがってその内容を共有することなくしては、外出された言葉だけで、お互い理解することは出来ない。この限界を認識することが重要である。

教育についていえば、鍼灸でも高学歴化は世界的な傾向であり、欧米で医師のこの治療分野への志向が強い。中国、韓国では医療に二制度を導入し、医師が鍼灸師に代わろうとしている。日本は一制度を維持し、鍼灸師は独特な立場にある。おそらく、さらにいくつかの鍼灸系大学が出現し、混迷を深めるかもしれないが、これは日本的な独特の流れの中で残ってきたもので、さらに、この制度を深化すべきだと私は考えている。即ち、一制度の医療の中に鍼灸を組み入れる方向性を維持すべきである。そして、鍼灸師に、現代医学の勉強、研修の場を拡大し、現代医学の知識と経験を更に向上させるべきである。なぜなら、二制度に分ければ、それぞれの制度の中で、自己完結型となり、発展を阻害する狭窄を起こしかねないからである。

また、この一両年の先端科学の発達、人を始めとし生命を持つものと科学技術との間の溝がより鮮明となり、要素還元主義の科学化の限界が露呈され、生き物（華岡青洲の言う活物）では、時間は一方的な流れであることが証明されてきた。この科学化が進んで、これまでまったく異質で、異なるアプローチでしか考えられなかった心や、情や、気の在り方が、納得可能なところまで近づいてきたように思える。

このように考えると、中国や韓国のように、国が規制し、法令化するような学問のあり方よりは、わが国の状況は、今雑然としているようであっても、将来に大きな期待を持つことが出来る。優れた人材が出れば、自然に収斂されてゆくと言うのが、私の思いである。